

PORTFOLIO

TAIKI UEKI



September 2026

PROFILE



上木 大汽 / Taiki Ueki

1994 年 北海道出身 美術家・写真家・発明家

写真を氷に刻み、時間とともに像が消失していく「氷写真」を制作している。

写真が本来持つ「記録・保存」という役割を問い直し、記憶、喪失、時間の不可逆性を主題とする。

独自に開発した氷への印刷技術により、2025 年に特許第 7759681 号「氷上対象物への印刷方法」を取得。

2026 年、第 13 回 500m 美術館賞グランプリを受賞。

STATEMENT

雪国・北海道で生まれ育った私にとって、冬の氷雪は春の訪れとともに消えていくものだった。子どもの頃から「そこにあったものが、いつの間にかなくなる」という感覚は、あまりにも日常的で身近なものだった。

一方で、写真は過ぎ去った時間を固定し、保存するためのメディアである。写真を撮り始めた当初、私は「残す」という行為そのものに強く惹かれていた。しかし、写真や映像、会話すらもデジタルデータとして半永久的に保存できるようになった現代において、ふと疑問を抱く。

すべてを残し続けることは、本当に人間にとっての幸福なのだろうか。

人の記憶は不完全だ。だが、忘れるからこそ人は過去を思い返し、美化し、現在を生きるために記憶をつくり直す。忘却とは記憶の欠落ではなく、人間的な営みそのものではないか。

そこで私は、保存のメディアである写真そのものを「忘れていくもの」へと反転させることを試みた。

独自に開発し特許を取得した技術（氷状対象物への印刷方法）を用い、写真を氷に刻み込む。氷に刻まれた像は、時間の経過とともに溶け、歪み、やがて跡形もなく消え去る。写真を「保存するためのメディア」から、「失わせるためのメディア」へと変化させる試みである。

記録に溢れた現代において、あえて消え去る写真をつくること。

記録することと忘れることの狭間で、私は人間と記憶のあり方を問い直している。



《獅子舞》

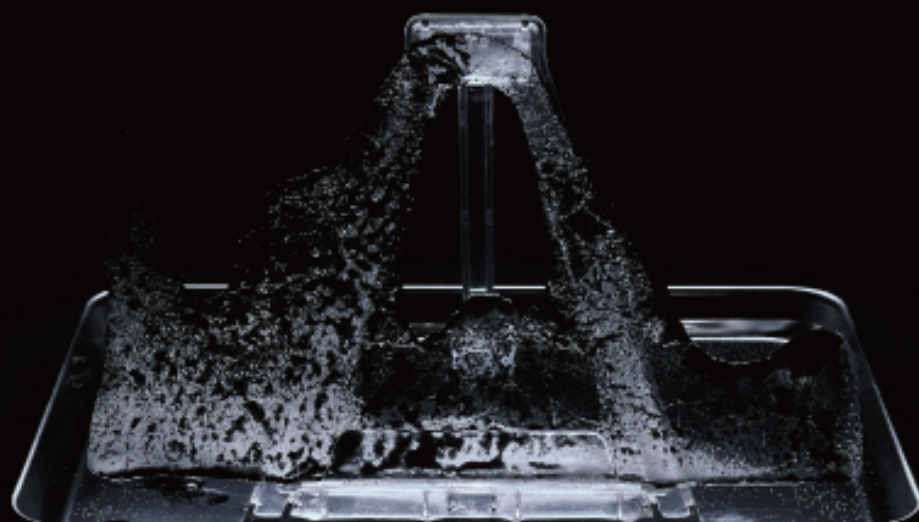
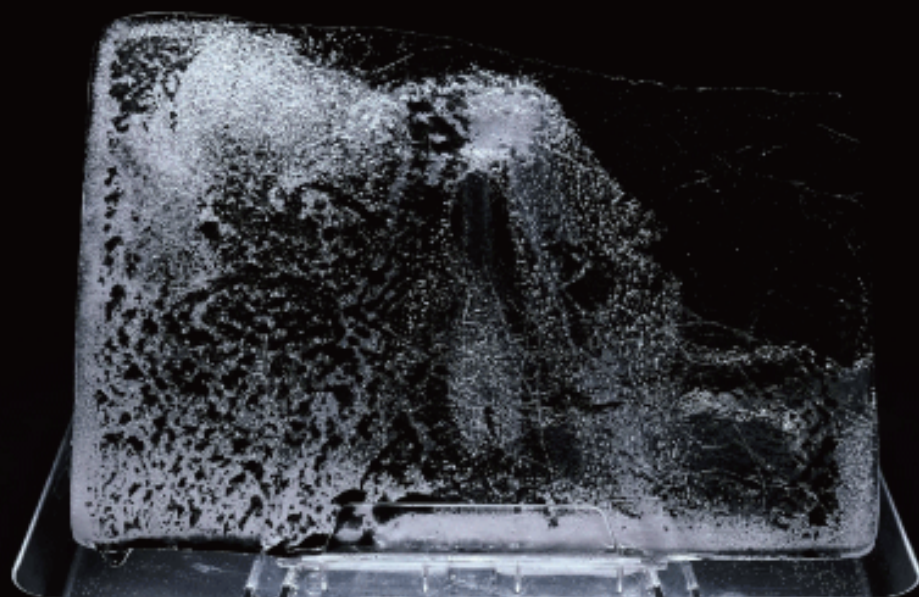
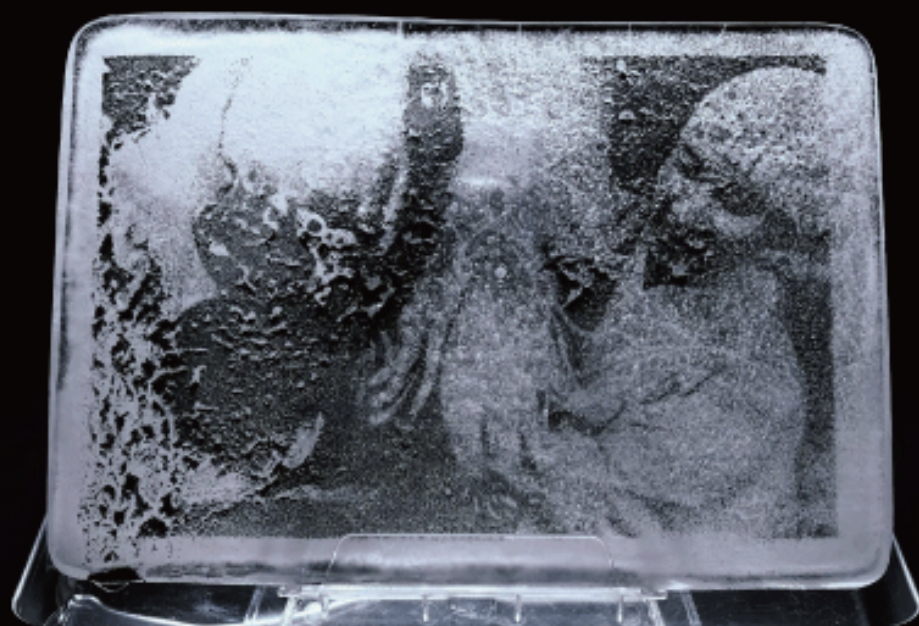


記憶をテーマに氷の作品を作り始め、過去のフォルダを眺めていたら出てきた画像の一枚。この写真を見るまで忘れていた思い出。記憶というものは本当に当てにならない。印刷した砂が流れ落ちる際に獅子舞に目のような模様が浮き上がり、印象的な作品となった。

【制作】2025 月 3 月

【サイズ】H 240 × W 170 × D 15 mm

【素材】氷、砂



WORKS

《結晶の塔》



偏光板を用いて、氷の結晶構造を可視化した作品。

被写体には東京スカイツリーを選んだ。人工物の象徴であるスカイツリーが氷の結晶の中に現れることで、都市と氷という異なる構造が一枚の写真の中で重なる。

【制作】2025年8月

【サイズ】H 180 × W 130 × D 8 mm

【素材】氷、砂、偏光板

WORKS

《アイスを食べる少女》



【制作】2025年7月

【サイズ】H240 × W170 × D15 mm

【素材】氷、砂

指先で触れればすぐに消えてしまう氷の儚さは、まるで記憶のように脆く美しい。
氷の表面に意図的に結晶構造を生み出すことで被写体の神秘性を際立たせた。
時間と共に消えゆく一瞬を写真として閉じ込め、刹那的な美を映し出す作品である。

WORKS

《失ってから今になる》



【制作日】2026 年 1 月

【サイズ】H2000 × W12000 × D700 mm (2 会場)

【素材】氷、砂、冷凍庫、トレイ、写真

第 13 回 500m 美術館賞 グランプリ受賞作品

500m 美術館の細長い空間に沿って、連続する写真を横一列に展開した。鑑賞者が歩くことで写真は次々と過去へ押しやられ、身体の移動そのものが時間の経過として刻まれる。

一方には、氷に直接印刷した「氷写真」を保存する冷凍庫を置く。しかし氷は溶け、像も消失する。もう一方には、電源の抜かれた冷凍庫と砂、空の銀色のトレイを残した。像が失われた後、トレイは周囲の光景を映し込み、消えた写真に代わる「今」を立ち上げる。

保存することではなく、失われていく過程を作品の中心に据え、過去へ沈む写真、溶けて消える像、そこに現れる現在を通して、時間と記憶の移ろいを表現した。



鑑賞者は展示の横を歩くことによって、作品の溶解過程をコマ送りで見える。
地下鉄の連絡通路という空間を最大限に活かした。



第一会場内には、実物の氷写真を冷凍庫内にて
”延命”する。



第二会場内には、氷写真が溶けた跡と鏡面の金属製の
トレーが今を映し出す。



【制作日】2025 月 11 月

【サイズ】H240 × W170 × D20 mm

【素材】ひまわり、氷、砂

「ZIMA」とは、スラブ語圏で“冬”を意味する言葉。

世界のどこかで、今も続いている戦争。

日常の中で、少しずつ人々の記憶から薄れていく。これは終わらない冬なのだろうか？



【制作日】 2026 月 6 月

【サイズ】 H240 × W170 × D40 mm

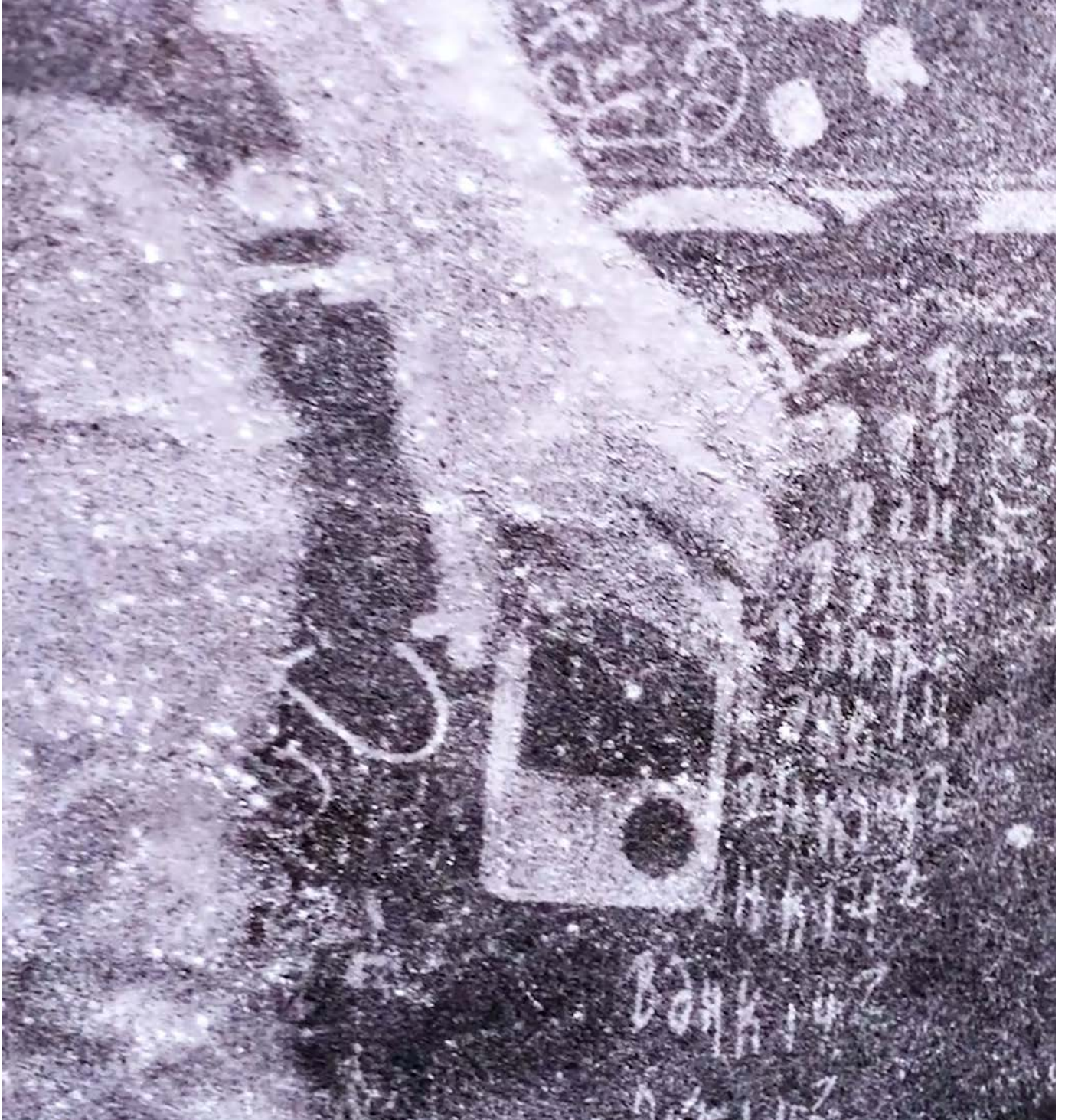
【素材】 青薔薇、氷、砂

氷に刻まれた女性像と人工着色の青い薔薇。

首元に置かれたハサミは、「美しくあり続けねばならない」という内面化された規範が生む、静かな自己抑圧を表している。美しさを保とうとする行為は時間の前では無力なのかもしれない。

WORKS

《僕は写真を残そうとしていない》



第2回 THE NEW CREATORS 映像部門 佳作選出作品

氷写真は溶ければ元には戻らず、複製や改変を前提としない「不可逆の記憶」として存在する。氷に映るスマートフォンを手にした男は便利さと加工が氾濫する現代を象徴し、内部の気泡や砂が刻む印刷層は手を加えられない現実の痕跡を物質として留めている。最後に氷を叩き割る行為は、複製と改変に覆われた世界への静かな反旗である。

僕は写真を残そうとしていない

むしろ消すために作っている。

氷で作った写真は

形を保つことが難しい。

でもそれでいい。

僕はデータが欲しいわけじゃない。

記憶に残れば、

それで十分だと思っている。



動画の最後には、制作した氷写真を叩き割る豪快なシーンがある。

自ら収録したナレーションも好評を博し、Instagramでの再生数は29.9万回を超えた。

Technology & Patent



《氷状対象物への印刷方法》

幼い頃に薄氷越しに見た世界の記憶を起点に、数千回に及ぶ試行錯誤の末、氷の表面へ画像を印刷する独自技術を発明した。

2025年に「氷状対象物への印刷方法」として日本国特許第 7759681 号を取得。この技術により、写真を保存するのではなく、時間とともに変化し消失する氷を媒体とした「氷写真」の制作を実現している。

CV

上木 大汽 / Taiki Ueki

1994 年 北海道出身 美術家・写真家・発明家

受賞・選出歴

- 2026 年 第 13 回 500m 美術館賞 グランプリ受賞
「失ってから今になる」
- 2026 年 第 2 回 THE NEW CREATORS 佳作選出
「僕は写真を残そうとしていない」
- 2024 年 JMPA 第 5 回インターネットフォトコンテスト 優秀賞受賞
「顔のない外套」

展示

- 2026 年 第 13 回 500m 美術館賞 入選展（北海道）
- 2026 年 第 18 回日本現代写真家協会 会員写真展（東京・長野・愛知）
会場内特別展示：壁面一部にて個人展示
- 2025 年 第 17 回日本現代写真家協会 会員写真展（東京・長野・愛知）

特許

- 2025 年 特許第 7759681 号
「氷状対象物への印刷方法」
※本特許は本名「上木 大樹」名義で取得。

掲載・取材

- 2026 年 東京新聞（8 月 3 日 第 30013 号「TOKYO 発」）
「氷写真 ― はかなく溶ける『記憶』のかげら」
- 2026 年 北海道新聞（2 月 28 日 第 29871 号「サタデーどうしん」）
「第 13 回 500m 美術館賞 グランプリに上木大汽さん」
- 2026 年 月刊生活情報紙 Wendy（2 月号 第 441 号）
「形のない消えていく記憶 - 氷そのものに写真を印刷する、新しい表現 -」

CONTACT



展示、作品、取材、技術利用・ライセンスに関するお問い合わせは、下記よりご連絡ください。



OFFICIAL WEBSITE



UEK1HPA

上木 大汽 / Taiki Ueki

TEL 080-4042-1088

E-mail uek1hpa@gmail.com

HP <https://ueki-taiki.com/>